

伝統産業と環境変化

田中 晴人, 横山 幸文, 高橋 誠一

(平成7年11月2日受理)

要 旨

社会・経済の大きな潮流は、地域の産業にとっても対応を迫られる重要な問題である。ここでは富山県を代表する伝統産業の一つである井波彫刻産業を題材として、国際化が地域の産業に及ぼす影響について考えてみた。近年、井波彫刻産業では町と一体になって「いなみ国際木彫刻キャンプ」などの国際化へ対応した事業を実施しているが、このことは木彫刻産業のみならず地域社会をも世界に目を開かせる契機となっている。

キーワード

国際化, 地域社会, 伝統産業, 井波彫刻, いなみ国際木彫刻キャンプ

はじめに

国際化や情報化といった社会・経済の大きな変化は、地域の産業や企業、そこで働く人達に大きな影響を及ぼしている。これまでも近代産業を対象としたこれらのテーマに関する研究は数多く行われている。しかし、地場産業、とりわけ伝統産業と呼ばれる業種は変化が比較的緩やかであり、市場の主要な部分を国内とするものが多いことなどから近代産業と比較した場合にはあまり研究対象とはされてこなかった感がある。本研究では富山県の代表的な伝統産業の一つである井波彫刻を取り上げ、国際化の進展に対応した産地の取組みの様子や問題点、意義について考察した。

1. 井波町の概況

井波町は富山県西部に立地し、瑞泉寺の門前町として600年以上の歴史を有する町であり、瑞泉寺の寺院建築を支えた木彫刻や漆塗りの技術がこの町の地場産業として、また、その伝統的技法の伝承をとおして町の文化として大きく根付いている。

さて、井波町の社会・経済的側面について簡単に概観すると、人口は近年漸減傾向にあり95年3月末の住民基本台帳ベースでは11,010人で、91年と比較すると3.0%減少している。しかし、世帯数はほぼ横ばいの状況にある。また、65歳以上の高齢者の割合が17.5%と富山県平均15.1%はいうに及ばず、富山県内の町村部の平均である15.9%と比較してもかなり高く、それだけ地域住民の高齢化が進んでいることが指摘できる。

表1 井波町の社会・経済に関するデータ

a. 人口 単位：人

91年	92年	93年	94年	95年	95/91 (%)
11,346	11,264	11,156	11,061	11,010	▲ 3.0

(注) 各年ともに3月末現在
(出所) 住民基本台帳人口

b. 世帯数

91年	92年	93年	94年	95年	95/91 (%)
2,872	2,862	2,876	2,887	2,875	1.0

(注) 各年ともに3月末現在
(出所) 住民基本台帳世帯

c. 年齢別人口構成 単位：%

	井波町	富山県全域	富山県 山形部
14歳以下	17.9	17.5	17.8
15～24歳	11.8	13.4	12.6
25～64歳	52.7	53.9	53.6
65歳以上	17.5	15.1	15.9

(出所) 90年国勢調査

2 井波町の産業と井波彫刻

産業面から井波町をみると、国史跡の高瀬遺跡での真綿や漆の生産など中世の頃から経済活動が行われていたことが知られている。また江戸時代には蚕の種紙を製造する蚕種業が盛んに行われ、元禄元（1688）年当時の井波の蚕種商人が「北は越後から出羽にかけて、東は信濃・甲斐、西は加賀から越前、南は飛騨・美濃、さらに尾張に至るまで」¹⁾ 広く販売活動を展開し、18世紀に入ってから株仲間も組織されていたことが記録に残されている。また、絹織物も盛んだった。一方、宝暦13(1763)年には瑞泉寺の再建工事が始まり、番匠屋九代の北村七左衛門たちの井波大工に加えて、京都から前川三四郎を始めとする著名な彫り師も訪れてこの仕事に着手し、ここに井波拝領地大工の持つ技法と伝統ある京都の寺院彫刻の技法とが競い合い、優れた作品が残された。この時、前川三四郎が北村七左衛門たち井波大工に本格的な木彫刻の技法を伝えたことが、現在につながる井波彫刻の始まりであるといわれている。また、同じ江戸時代の文化元（1804）年の井波町の人別帳には「ぬしや太兵衛」や「桧物屋長兵衛」などの漆職人の名が記載されており、特に後者の

家系からは優れた塗師が育ち、井波町において彫刻と並んで町を代表する井波漆芸の伝統を今に伝えている。

明治時代に入ってから、輸出羽二重の生産が開始されている。これは当時の伝統的な国内の羽二重産地である桐生などと競合せず、しかも少額の資本によって事業が開始できたことから、明治22（1889）年に富山県内初の織機110台を有する工場が町内に生まれた。明治期に輸出羽二重の生産を開始した例としては金沢市もあげられる²⁾。これらの大半は明治30年代後半にピークをむかえたものの、明治42（1909）年にはこの地の創業者である大谷彦治郎の工場以外は経営が行き詰った。その後、大正7（1918）年には最新鋭の力織機20台を有する竹村機業場が創業し、これが現在の井波町を代表する企業の一つである「かりーな株式会社」につながるものである。この流れはその後も続き、井波町の産業では繊維産業の占める位置が大きい。同様に山間部に立地していることなどから木材工業も主力産業の一つである。また、興味深いのは優れた井波大工の技術を生かして松井建設などの企業が井波町から生まれていることである。一方で伝統的な井波彫刻の世界を継承する流れと、他方では建設会社として活躍し

ているのである。

現在の井波町の産業、とりわけ製造業では
 かるりーな株式会社や勝星産業株式会社、東
 洋紡績株式会社井波工場等の繊維工業や大建
 工業株式会社等の木材関係、東洋ファルマー
 株式会社等の医薬品工業などがみられるが、
 全般的に業種の範囲は比較的狭く、その規模
 も小規模のものが中心で、大手6工場での
 生産額の90%以上を占めるといわれている。
 このような井波町の産業の現在の姿を統計デー
 タに基づいて概観すると、次の表に示された
 とおりである。

表2 井波町の産業に関するデータ

a. 事業所数及び従業員数（非農林水産業）

91年	91/86(%)	従業員数(91年)
753	▲ 4.9	4,943

(出所)「地域経済総覧'96」(東洋経済新報社)

b. 製造業関連指標

	91年	92年	93年	93/91(%)
工場数	50	53	51	2.0
工場従業員数	1,594	1,579	1,591	▲ 2.0
製品出荷額等	32,433	32,175	32,238	6.0

(注) 製造品出荷額等の単位は100万円
 (出所)「地域経済総覧'94~'96」(東洋経済新報社)

c. 商業関連指標

		91年	94年	94/91(%)
卸 売 業	商店数	16	14	▲ 12.5
	従業員数	67	78	16.4
	販売額	1,545	1,660	7.4
小 売 業	商店数	345	332	▲ 3.8
	従業員数	968	961	▲ 0.3
	販売額	10,990	11,583	5.4
飲 食 業	商店数	28	27	▲ 3.6
	従業員数	-	87	-
	販売額	345	417	20.9

(注1) 販売額の単位は100万円
 (注2) 飲食業のみデータは89年及び92年
 (出所)「地域経済総覧'92~'96」(東洋経済新報社)

次に、井波町の代表的地場産業である井波
 彫刻についてみる。ここでは、井波彫刻協同
 組合から入手した資料を中心として、他にい
 くつかの調査結果等を参考にして述べる。

井波彫刻は、昭和50年5月に通産省の「伝
 統的工芸品産業の振興に関する法律」(通称
 「伝産法」)に基づいて指定された伝統的工芸
 品で、井波町を中心として庄川町、福野町、
 福光町、城端町、砺波市の1市5町の地域で
 生産される木彫品を総称している。平成5年
 9月末現在の組合員の事業所数は140であり、
 これに非組合員である36を合計した176が全
 事業所数となっている。そして、これらの事
 業所に従事する従業者数は約290人程度とみ
 られている。年間生産額については、平成元
 年以降、18億8,400万円→21億 1,600万円→
 22億円→22億4,000万円と順調に推移してき
 たものの、平成5年には21億5,000万円とや
 や減少している。ちなみに先にみた井波町全
 体の製造品出荷額は322億3,000万円であつた
 ことからみると、このなかに占める木彫刻の
 割合はわずか1割にも満たない程度である。
 本来、手作業を中心とした伝統的工芸品の生
 産額は近代産業と同列に比較すれば、非常に
 そのウエイトが低いことは致し方ない。しか
 し、伝統的工芸品の存在は、それを作るため
 には高度な技術や技能が必要であり、その熟
 練の継承に関する伝統や材料に関する知識も
 必要である。さらにはそれらの工芸品を使う
 立場にある消費者の見識とその背景にある文
 化的遺産など様々な歴史的な存在を伝承して
 おり、これらのことが一面でその地域の文化
 を支える大きな力となっているといえる。こ
 のような観点から考えると、単に金額的な見
 方を超えたところに、伝統的工芸品の存在が
 深い意義を持っているといえる。

さて、先の事業所数を市町村別にみていく
 と、全体の66.5%に当たる117が井波町にあ
 り、次いで庄川町21(全体の割合、以下同じ。
 11.9%)、福光町12(6.8%)、砺波市11(6.3

%)、福野町10 (5.7%)、城端町5 (2.8%) となっている。これに対して年間生産額ベースでは井波町17億9,200万円 (80.0%)、庄川町2億6,900万円 (12.0%)、福野町9,000万円 (4.0%)、福光町4,500万円 (2.0%)、砺波市及び城端町ともに2,200万円 (1.0%) となっている。当然のことながらこの結果からも明らかのように、井波彫刻は井波町が中心で事業所数で66.5%、年間生産額で80.0%を占めている。

次に製品の種類別割合では欄間が最も高く53%を占め、次いで置物21%、神社曳山19%、パネルなど7%となっている。これを昭和57年に富山県商工労働部経営指導課が行った井波木彫刻業の産地診断報告書のなかのデータと比較すると、欄間45.4%、パネル等の壁面装飾品20.0%、天神様や獅子頭等の置物24.2%、衝立6.4%、寺院彫刻2.7%、その他1.3%となっており、製品の区分方法がやや異なっているものの、欄間が最も高い割合を占めていることは同様ながら、一般的にいわれるように欄間の割合が低下しているとはいえない。むしろ欄間の割合は高くなっている事実がみられる。反対に、パネル等の壁面装飾品の割合が低下していることが著しいといえる。

伝統的工芸品産業振興協会が把握している伝統的工芸品及び工芸用具・材料は延べ1064品目に上る。このうち通産省の伝産法によって指定を受けている伝統的工芸品は全国に184品目(平成7年4月現在)となっている。伝統的工芸品産業振興協会が把握している1064品目に関してみると、それらの1事業所当たりの従業者数は6.7人、また、従業者1人当たりの年間生産額は350万円である。これに対して、井波彫刻は1事業所平均の従業者数は2.1人で、従業者1人当たりの年間生産額は715万2,500万円となっている³⁾。井波彫刻の場合には生産システムとして分業化することが困難であると考えられているため、いわゆ

る1人親方と呼ばれる職人がデザインから製造までの工程をこなしており、しかも従業者を持たない人が多いことが特色である。そのため、1事業所平均の従業者数は極めて少ないながら、従業者1人当たりの年間生産額は2.04倍と非常に高いものとなっている。

さて、現在、この産地が抱える経営上の問題点としては、「販売不振」、「円高で海外の類似産地の圧力が高い」、「人件費高」などといったことが指摘されている。そもそも、井波彫刻とはこの地域の木彫技術を用いて制作した木彫品のことをいい、この意味では井波彫刻は単なる伝統工芸品という以上に美術工芸品としての性格を強く持っており、この産地を代表する製品である欄間は製品単価が数百万円にもものぼるものがある。そのため、現在の国内経済がバブルの後遺症を残している状態では販売が思わしくないことは容易に想像されることである。また、営業に関しては、「クチコミ」で顧客から紹介されて注文が寄せられるために、営業を専門とした人もいない状態である。このような点も井波彫刻が美術品的性格を有することを示す一端といえる。

ところで、井波彫刻としては高級品の生産を続けているが、一方では台湾辺りから廉価な類似品が輸入されている状態であり、そのため市場ではかなり競合する場合があるという。このことが上記の問題点として指摘されていたのである⁴⁾。しかし、このような廉価な類似品に対して、産地では敢えて品質を下げても価格的に対応可能な商品の生産は産地の将来を閉ざすもののだとして、対抗措置を抗するようなことは為されていない。むしろ、従来の技術水準の維持を図ることに力が注がれており、後にみるように世界的な視野から井波彫刻のイメージアップを図る施策が進められている。従来、主要商品である欄間は壁面装飾品としての性格を強く持つものであり、そのため市場の大半が北陸となっていることにも、国際化に対してマーケティング面での

対応が明確になっていない理由の一つに考えられる。

3 地場産業と国際化

既にみたように、井波町にあってはその産業面で大きなウェイトを占めているのは井波彫刻ではなくて、繊維工業や木材工業などのいわゆる近代産業であった。これは、このような判断の基準を製品の出荷額という点で考えたからである。しかし、このような観点からした場合、多くの伝統的工芸品はそれぞれの地域において小さな存在でしかないことになる。しかし、京都や金沢などの都市では近代的な産業が多くみられるにもかかわらず、伝統的工芸品の存在がその都市のイメージや文化と切ってもきれない関係にあることは否定できないであろう。それは、ものを作るという点では伝統工芸品産業でも近代産業でも同じであるが、しかし、この両者の間には大きな質的相違がみられる。それは、近代産業の論理としては、

- ・理論の集積
- ・普通的生活を支える
- ・少品種多量生産
- ・機能中心主義（経済性の追及）
- ・量に重点をおく

といった点が重視されているのに対して、伝統工芸品の場合には、

- ・智情意の総合
- ・生活の個性を支える
- ・多品種少量生産
- ・美中心主義
- ・質に重点をおく

といった点が重視されているからである。このことは商品選択という観点から整理すれば、近代産業によって生産された商品の選択にあたっては、

- ・日常消費財など相対的に安価なもの
(例)台所用品など消費度の高いもので機能性に重点がおかれる

- ・情緒性<実利性
- ・絶対価格を求める

など生活の手段として理論的な選択が為されているのに対して、伝統的工芸品については、

- ・耐久消費財など絶対的に高価なもの
(例)家具、高級被服などファッション性に重点がおかれる
- ・情緒性>実利性
- ・相対価格で満足する

といったいわば生活の目的として情緒的選択が為されていることが両者の相違として指摘することができる⁹⁾。このような点からみると、近代産業中心の現在のわれわれが生活している社会において、伝統工芸品の持つ重要性が理解できると思う。それは優れた伝統工芸品の存在は、その地域に個性ある文化を育む大きな背景となっているのであり、ひいてはその地域を個性ある存在としているといえる。このことを確認した上で、次に井波町で近年取り組まれている国際化に対応した事業についてみる。この事業は、井波町が町の事業として実施したものであるが、その狙いは井波彫刻を想定したものであることはいうまでもなく、伝統工芸品産業の存在が町の施策と大きくかかわっている例であり、それは今回の研究テーマである国際化という大きな社会・経済的トレンドを意識したものである。

井波町では平成3年7月22日から同8月10日にかけての20日間、国内外の彫刻家を町内閑乗寺公園に集めて、参加者それぞれが自由に作品を制作し、このことをとおして彫刻家同士がお互いに交流を図るとともに、井波町を「木彫りの里」として世界に向けてアピールすることを目的とした第1回「いなみ国際木彫刻キャンプ(The Inami International Wood Carving Camp)」を開催した。この事業は、井波町、井波教育委員会、社団法人富山県芸術文化協会、井波美術協会、井波彫刻協同組合など11機関からなる「いなみ国際

木彫刻キャンプ実行委員会」を主催者とし、富山県及び富山県教育委員会が共催者となったほか、国際交流基金や財団法人とやま国際センター、富山コンベンションビューローなど8機関が後援し、町内外の民間企業なども協賛して実施されたものである。この「いなみ国際木彫刻キャンプ」には、海外12カ国から13名の彫刻家と我が国からは8名2グループが参加した。この時に制作された作品は、現在も閑乗寺公園や「いなみ木彫りの里」に展示され、いつでも観賞することが出来るようになっている。この時の入場者は3万人を数えている。この事業は世界に向けて井波町を木彫刻の町としてアピールする上で大きな効果があったといわれ、また木彫刻家や一般町民にとっても身近なところから国際化への目が開かれたという点で意義深いものと考えられている。また、今年（平成7年）も、7月22日から8月6日にかけて第2回「いなみ国際木彫刻キャンプ」が開催された。今回は、海外13カ国から13名の彫刻家と日本から6名2グループの彫刻家及びグループなどが参加し、制作された作品は前回同様閑乗寺公園に展示公開された⁶⁾。また、関連イベントとして、国際シンポジウム、木彫刻工芸職業訓練校の生徒を対象としたワークショップ、木彫り体験コーナーさらにはキャンプに参加した彫刻家のお国自慢料理による国際食文化交流会など大人から子供まで幅広く参加でき、互いの文化に触合うことのできる催物が開催された。入場者数は第1回目を1万人上回る4万人と発表されている。このように一段と木彫刻を核とした地域全体の国際交流が進展しつつあるといえる。

このほかにも町の事業として、海外の著名な木彫刻の展示会等に町内の木彫刻作家を派遣している。最初は昭和63年度に「新工芸オーストラリア展」に3名、同じく「ハンガリー国際木彫刻キャンプ」に2名派遣しており、現在に至るまでこの事業は継続されている。

特に昨年9月には富山市で開催されたワールド・パートナーシップ・フォーラムに参加した在日外交官夫人が井波町を訪れ、木彫りの里で彫刻を体験するという催物も開催されるなど、徐々に国際化に対応した事業が拡大している。

こうした井波町での積極的な取り組みは、木彫刻が町を代表する伝統産業であり、また町が誇る大きな文化ともなっていることを重視したものである。しかし、個々の木彫刻に従事している事業所では、従来、主要製品が寺院建築に由来する欄間が主であり、これは北陸を中心とする地域が顧客の多くを占めていたという現状から、国際化という大きなトレンドには直接的にあまり影響を受けずに来た経緯があった。

しかし、井波彫刻の本質は何かといえ、それは例えば、欄間に代表されるような形としての木彫品というよりも、むしろ、それは壁面装飾のためのこの地域特有の高度な木彫刻技術である。この意味では井波彫刻の将来を考える上では、この技術の継承者の確保・育成が最も重要な点である。現在は、この技術の習得を志す人が全国から井波町へ集まってくる状況である。伝統的技法をこれらの人たちに伝えていくことは、非常に重要なことである。加えて、「いなみ国際木彫刻キャンプ」にみられるように、伝統的な高度な井波彫刻の様々な技法の中にも、国際化という視点から産地に対して新しい血を注ぐことも長期的な視野からはより重要なことといえる。こうした国際的な交流を継続して行くことが重要であり、このような試みの影響は長い時間を経て、産地に変化をもたらすものと思われる。

むすび

今回、我々は「伝統産業と環境変化」をテーマとして井波彫刻を題材とした共同研究を行った。われわれは日頃から敢えて異なる専門分

野であることを生かした研究を行いたいと考えていたことから、今回のテーマについて取り組んでみた。井波彫刻は北陸を中心として比較的有名ではあるが、産業の規模としては決して大型とはいえない地場産業である。現地へ足を運び、町役場を始めとして井波彫刻関係機関や金融機関などにヒアリング調査を実施し、また、「いなみ木彫りの里」などで作品を目にするなかから、山間部に立地する伝統工芸品産業にも国際化の影響がみられることに大きな関心を抱いた。そして、地元自治体がそのために尽力されていることの意味について考えてみた。その結果、単純に産業としてみた場合には近代産業とは比べものにならないくらい小さな存在である伝統工芸産業がその地域の文化を育み、そして地域の個性を作り出す重要な存在であることを改めて認識した。しかし、そのためにも時代の大きな流れに背を向けていることは出来ないのであり、とりわけ将来を展望した時には、新しい血を注いでいかないと社会の流れに取り残され、ひいては地域の文化ばかりでなく地域社会そのものが衰退しかねない状況も考え

られる。このように考えると、「いなみ国際木彫刻キャンプ」における木彫刻家の交流は井波町において木彫刻に携わる人たちばかりでなく、一般町民にとってもその時に制作された作品に触れることによって徐々にそのインパクトが現われてくることは想像に難くない。そして、このような交流を通じて世界の木彫刻家達に井波彫刻の存在をアピールできたことは、やがて世界に対して木彫刻に関する情報発信基地となっていく可能性も大きい。このようなインパクトがさらに井波町の彫刻関係者や地域社会にも浸透していくと思われる。そして、そのためには今後も着実に地域社会が、このような流れに対応していく努力が求められている。

最後に、今回の研究に当たってヒアリング調査や貴重な資料提供でご協力をいただいた井波町役場企画課及び経済課、北陸銀行井波支店、いなみ木彫りの里事務局、井波彫刻協同組合、井波町商工会に感謝するとともに、今回の研究に助成していただいた富山県高等教育振興財団には厚くお礼申し上げる。

引用文献・脚注

- 1) 井波町商工会誌編集委員会「井波の商と工・その軌跡」(平成3年3月、井波町商工会) p.24
- 2) 明治期の金沢市における輸出羽二重産業の生成とその意義については、田中晴人「ネットワーク型産地構造と産業情報」(高岡短期大学紀要第4巻、1993年3月)を参照願いたい。
- 3) 伝統的工芸品産業振興協会「全国伝統的工芸品総覧」(平成5年3月)
- 4) 同様のことを伝統産業に即して例示すると、台湾製の安価な木製漆器が多数日本国内に出回っている。これは、漆器を扱っている国内のある消費地問屋主導の形で台湾に技術指導したことがきっかけになって始まったことといわれている。主に、ギフト商品で国内製品と競合する。
- 5) ここでは宮崎県「ひむか邑」の理論的指導者である黒木進氏の考え方を参考にした。
- 6) 第2回目に開催されたキャンプでは、実行委員会12機関、後援団体9機関からなり、それぞれ初回の時と比較して1機関増加している。また町内の企業及び井波町にゆかりの深い企業等18機関が協賛団体に名を連ねている。

【参考資料】

- ・板倉勝高著「地場産業の発達」(昭和56年9月、大明堂)

- ・富山県商工労働部経営指導課「井波木彫刻業産地診断報告書」（昭和57年11月，富山県）
- ・井波町商工会誌編集委員会「井波の商と工・その軌跡」（平成3年3月，井波町商工会）
- ・山崎充著「豊かな地方づくりを目指して」（1991年4月，中央公論社）
- ・上原信博編著「構造転換期の地域経済と国際化」（1992年3月，御茶の水書房）
- ・坂井誠一著「富山県の歴史」（1993年1月，山川出版社）
- ・北陸経済連合会「北陸の伝統産業を考える」（平成6年4月，北陸経済連合会）ほか

Traditional Industry and its Internationalized Environmental Change; the Case of Inami Wood Carving Industry

Haruto TANAKA, Yukifumi YOKOYAMA and Seiichi TAKAHASHI

(Received November 2, 1995)

ABSTRACT

Social and economic changes present great challenges many traditional regional industries have to face. The purpose of the present paper is to examine an example of traditional industry in Toyama prefecture: the Inami wood carving industry. The industry has a long history and is well established in the region but in recent years it has been under the growing influence of the internationalized economy. The Inami municipality and the industry is making a great effort to cope with such a situation, creating a new international event which aims to open the area to the world: the Inami International Wood Carving Camp. In this paper, the influence of more internationalized environment on today's traditional industry is carefully studied.

KEY WORDS

Internationalization, Local community, Traditional industry, The Inami wood carving industry, The Inami International Wood Carving Camp